西欧と日本の民間心理学比較研究

實　川　幹　朗

はじめに

民間心理学（Folkpsychology）とは，学問的な心理学とは別に，一般の人びとが心についていだいている顕在的または潜在的な理論である。これはある文化と時代の，心についての基本的な態度の反映と考えられる。学問的な裏付けのない先入見だが，そこに生きる人びとに対する強制力をともなっている。つまり，学問的でないがゆえにかえって，学問的な心の研究に指針を与える存在ともなるのである。学問の根拠づけに「絶対」があり得ない以上，この経緯はむしろ必然とさえ言えるであろう。

今回の研修では，西洋の民間心理学の臨床心理学への反映を軸に，比較研究を試みた。とくに，わが国の心の教育において，日本の民間心理学と西欧から輸入された理論との枠組みのずれが作り出す問題点に注目し，こんにちの道徳教育の在り方への提言に進んだ。

西洋近代の民間心理学と「心の囲い込み」

今日のわが国で，心理学といえば，科学的な実験心理学ではなく，人の生き方，心の在り方に指針を与えようとする臨床心理学がまず念頭に浮かぶ。この心理学とその実践領域である心理療法は，この二十年ほどのあいだに急速に勢力を拡大したきた。経済成長を終えてゆとりが産まれ，かつ未来への展望が持ちにくくなったこの時代の要請だと考えられる。しかし，その思想内容を正確に把握しなければ，個々人の価値の領域にまで踏み込んでくるこの心理学の適切な位置づけは不可能である。

臨床心理学の歴史は非常に短い。のみならず，心理学と呼ばれる学問一般が，西洋の十九世紀後半に始まったと考えられている。もう百年以上たっているとはいえ，歴史学などは数千年前からあるのだし，エジプトのピラミッドを考えてみれば，物理学でもそのくらいの歴史を持つことがわかる。心理学の新しさは，考えてみれば不思議である。こんなに重要で身近な心をあつかう学問が，どうしてやっと百年あまり前の西洋に始まったのか。心の問題は昔からずっとあったはずである。ここには，なにか特別な事情があるのではないだろうか。

西洋近代の世界観の特徴とは，何なのだろう。心の問題に限って言うなら，それは心を「個人の内面」と同一視する見方だと，考えられる。ちょうど，人間が個々人で一つずつ箱をかかえていて，中身を見ることができるのは自分だけだ，というようなものである。ウィトゲンシュタインは，「箱のなかのカブトムシ」という有名なたとえで，この近代的な「心の理論」を表わした。その中心をしめるのは，感覚を基礎とする意識である。さらにこの箱が二重底になっていて，自分にもわからない心の隠された部分があれば，それが

無意識ということになる。さらにそれらは，独特の存在様式を持つ「心」として体，物質とは区別されるのである。

この発想は，一般の人から科学者に至るまで，今日では広く受け容れられているが，何らかの学問的な証明を経た結果では，じつはないのである。したがって，一種の民間心理学ということが出来るだろう。

こうした心のとらえ方を，私はかつて他の著書の中で「心の囲い込み」と呼んでみた。「箱形人間観」と言う人もいる。だが，心の位置づけがこんなふうになったのは，意外にもたいへん新しいことなのである。本格的に始まったのは十九世紀も末のころで，したがって，心についての近代的な理論が，この構えに集約されていると言える。まさに臨床心理学の誕生のころであった。そしてこの人間観に大きな影響を受けているのが，臨床心理学のほかに，現在もなお実験心理学の基本的な枠組みをなしている行動主義と，そして二十世紀を代表する哲学思潮と言える現象学や実存主義なのである。

これらをひとまとめにあつかうのは，これまでの思想史の常識には外れたものかもしれない。しかし，心を個人という「箱」の中に囲い込もうとする発想と，その枠組みのなかでの意識と無意識の対立を軸に考えれば，これらの思想には重要な共通点がある。つまり，臨床心理学をふくむ心理学の歴史が短く，新しい学問だというのは，名前のつけ方によるところが大きい。いま述べたような「新しい」十九世紀末から二十世紀にかけての人間観，世界観に基づいた心の学のみを，心理学と呼ぶことにしているからなのである。心理学に固有な多くの困難は，この世界観に関連している。

近代的な意識概念と無意識との役割の逆転

近代臨床心理学のいちばんの特色として「無意識の発見」を筆頭にあげるのが，しばらく前までの通説であった。しかし，これは二つの点であやまった説である。まず，無意識の心の存在は臨床心理学の発見によるのではなく，古くから知られていた。ユダヤ＝キリスト教の教学の伝統において，神の理性の働きは，人間のような不完全な心とは，すなわち意識を中心とするような動物的な働きとはまったく別のものであった。人間でも，「万物の霊長」の名に値する理性の行使においては，心は肉体的な感覚から遠ざかり，意識を薄めるのであった。すなわち，近代以前には肉体や物質を結びついていたのは意識であって，無意識は精神的なものだったのである。

もうひとつには，近代臨床心理学理論の中軸をなすのが，じつは無意識ではなく，意識なのだという点をあげなければならない。意識すると病気がなおる　―　西洋近代にうまれた臨床心理学は，声をそろえてこう語りかけてくる。例えば，精神分析学の創始者フロイトによれば，こうなる。

つぎのように主張しようと思います。私どもがある症状につきあたるごとに，この患者には特定の無意識的な過程が存在しており，まさにその過程こそがこの症状の意味を内包していると推定してよい，と。しかし同時に，症状が成立するためには，この意味が意識されていないことが必要なのです。意識的過程からは症状は形成されるものではありません。無意識的過程が意識されるようになるやいなや，症状は消失せざるをえないのです。（『精神分析入門』懸田克躬訳）

この主張は，フロイトだけのものではない。無意識をあつかう近代臨床心理学のほとんどの理論に，共通して認められる前提と

なっているのである。しかしながらこれは，かなり大胆な，珍しい主張ではないだろうか。

近代臨床心理学の特徴を考えようとすれば，まず意識のこの特殊な役割から出発すべきなのである。無意識の心理学として知られる近代の臨床心理学が，じつは意識をたいへん重要に考えている。意識からはけっして心の病は起こらないし，意識するやいなや症状は消えうせるのだと聞けば，意識は「万能の妙薬」かとさえ言いたくなる。さらにこの意識の重視が，臨床心理学のあつかう無意識の特殊性と，深く結びついているのである。

「万能の妙薬」といえば，西洋では，中世の錬金術のなかで用いられたアラビア語起源の言葉「エリクシール」が，まさにこれである。百年あまりの歴史しか持たない，近代を代表するような臨床心理学の中心に，じつはこの古い伝統が再現している。臨床心理学の思想的な，また宗教的な性格付けにおいて，この点は重要である。

無意識は古くから知られていたと，さきに述べた。けれども，「無意識」（ドイツ語でウンベヴスト，英語でアンコンシャスなど）という言葉は，さほど古くない。だいたいこの二百年くらいのあいだで，いっぱんに使われはじめた表現である。どうして言葉だけが新しいのだろうか。

それはこの言葉が，意識との対比のうえに形作られたからである。意識が「万能の妙薬」となったとき，これに対立するなにかが「無意識」という名前をあたえられた。そこではじめて「無意識」が，まさに「意識にのぼって」きたわけである。心が，人類の歴史のなかで，この時代の西洋文化をまってはじめて取りえた形態であった。

古くから知られていた無意識は，意識に対立するようなものではなかった。それはむしろ，心のふつうの働きだったのである。古くからの心が，臨床心理学から絶大な信頼をゆだねられた意識との対比のもとで，新しいすがたを取るようになった。私はこれをあえて，臨床心理学の「発明」した無意識と呼ぶことにしたい。まず意識が「万能の妙薬」となって，それまでの無意識への従属を断ち切った。そして逆さまに無意識のほうを「非精神的な」体に結びつけ，貶め，支配しようと考えるに至った。

臨床心理学はたしかに無意識を論じ，働きかけることを特色としている。しかしながら，無意識への働きかけは意識を通して行なわれる。だから主役は意識であり，無意識は相手役なのだと言ってよい。さらに意識と無意識とのあいだには「明と暗」，「善と悪」，「光と闇」のような対立関係が見出される。このときに意識の役割は明・善・光の側であり，無意識のほうは暗・悪・闇のほうにまわるのを常とする。もちろん，これは大ざっぱな分類で，細かく見てゆけば例外も出てくるが，無意識を扱う臨床心理学の原則はこうなのである。

古くからの無意識が，このような損な役回りだけを引き受けたのも，この時代，すなわち近代臨床心理学がその形を表わした十九世紀末ごろが初めてなのであった。

臨床心理学に流れ込むユダヤ＝キリスト教の伝統

ヨーロッパ近代の中頃に入った十八世紀においてさえ，感覚や肉体的な感情などの「心」なら，物質にも備わっているのであった。これが，科学者を含む民間心理学の主流の発想であった。対立は物質と非物質のあいだにある。これを，物質と「精神」のあいだの対立

と呼んでもよい。心どうしが，精神と物質に分かれて対立する。つまり心にも，「精神的な心」と「物質的な心」があるわけである。ユダヤ＝キリスト教の正統派神学では理性は無意識の精神とされ，物質的な心である感覚的意識に対立する。

正統派からはしばしば弾圧された裏の思想においても，例えば錬金術でも，心の中心はこの理性なのであった。しかし，錬金術では理性は物質とされるので，この点において，つまりどちらも理性を尊重しようとするのに，対立してしまうのである。そして，理性の中心部分は，どちらも無意識の心なのであった。

物質的と精神的とは，要するに名前のつけ方の違いにすぎないと考えたほうがすっきりする。対立のための対立なら，折り合いがつかないのもあたり前である。政治的支配と結びついていた正統派と，弾圧されるがわだった異端との対立，という要素もある。棲み分けなら対立にならないが，同じ構図で優位に立とうとするから戦いになるわけである。現代の世界でも，一神教どうしが戦いをまじえているが，人間どうしの対立の本質は千年や二千年では変わらないものらしい。

なるほど錬金術師は物質を変化させようとした。だが，正統派の神学でも，それは試みられていた。ローマカトリックの代表的な儀式である聖餐式では，「聖変化」の秘儀で，パンと葡萄酒がキリストの肉と血に変わる。それなら錬金術で，鉛が金になっても不思議ではあるまい。正統派の神学では，主なる神はマリアという人間の女に，救世主となる子供を産ませる*。いっぽう錬金術では，王と王妃の「神聖な結婚」が物質のなかに認められた。錬金術の目的は，この「神聖な結婚」によって，物質のなかに産み落とされているキリストを解放することだと考えられていたのである。

＊神が子供をもうけるのは奇跡にはちがいないが，当時の時代背景からすれば，ありふれたことであった。ギリシア＝ローマ神話にも類話があふれている。日本の神話や昔話も，この類いの話にはことかかない。さらにわが国の民俗では，つい数十年前まで，じっさいに身の回りに起ると考えられていた。柳田国男は，大学生として帰省したおりに，近所の幼なじみが「神の子」を産んでいたことに驚き，民俗学への決意を固めたと言われる。

当事者たちに言わせれば，これらは，まったく別のことなのにちがいない。だが，じっさいのところ，キリスト教の正統を本気で信じている人以外には，これらのあいだに本質的な区別を感じ取ることは難しいであろう。ユングも，「錬金術のドラマは，キリスト教のドラマが鏡に映じた一種の鏡像である」と述べている（『結合の神秘』）。錬金術師たちも，そう考えていたようである。『立ち上がる曙（アウローラ・コンスルゲンス）』という題の，錬金術の古典がある。後世の写本には興味深いさし絵が付けられ，ユングも『心理学と錬金術』のなかで，ここから多くを引用しているが，この書物はカトリックの正統中の正統トーマース・アクィーナースの作だと，かつて言われていたのである。現在では偽作というのが定説だが，かの神学者の説だと言われても信じたくなる状況があるのは，まちがいのないところである。

いずれにせよ理性とは，正統派神学でも錬金術でも，無意識のなかから浮かび出てくる霊妙な力なのであった。この考え方がユングに受けつがれ，彼の心理学における無意識の治癒力や自律性の思想となってゆくのである。だからユングは，中世ヨーロッパ思想の復興者とは言えようが，もっぱら埋もれていた裏の思想を復興した人物だ，とまでは言い

きれない。なぜなら，表から行っても裏から行っても，行き着くところはそう違わないからである。牧師の息子であった成育史からしても，ユングはキリスト教の伝統的な考え方を，当然のこととして呼吸しつつ育った人物だった。近代臨床心理学は，裏からも表からも，西洋中世の無意識に影響を受けて成立したのである。

このユングでもなお，意識の基本的な役割は強調せざるをえなかった。近代に形成された意識概念は，無意識の理性の「万能の妙薬」の役割を，かなりの部分において，引きついだのである。無意識の妙薬としての働きは，錬金術にかぎられたことではない。正統派の神学においても，全能の神の奇跡は，あらゆる病まいを癒やすのだからである。近代において新たに信頼を得た意識が，それまで無意識の持っていた神の理性としての性格を奪ったのだと言える。この無意識から意識への逆転のあたりにも，臨床心理学の，西洋近代の申し子としての性格が，いかんなく発揮されている。

かつての物質と精神の対立が，名前だけで実体に欠けるのだとすれば，現代の臨床心理学の考察においても，考慮すべき論点をなすのではなかろうか。つまり，心理療法においては，体に触れてはならないと考える「体のタブー」とも言うべき態度が見られる。体を用いた行動ではなく，意識に結びつけられた言葉のみによって，問題を解決すべきだとされるのである。この主張がどれだけ理論的根拠を持ちうるのかという点は重大である。

私たちはじっさいに，心と体をともに用いて生きている。いや，用いているのではなく，「心と体で」生きているのではないか。心も体も，ふだんは区別などしていないだろう。そのなかから，ことさらに「心理」を取り出してくることの意味をもういちど問いなおすよう，この歴史は語っているのではないか。すなわち，臨床心理学は「心の専門家」による「無意識の科学」というよりは，意識をめぐる宗教思想なのであり，西欧のユダヤ＝キリスト教的な民間心理学を今日に再現させたものなのである。

こうした新しい対立関係の意識と無意識が，二十世紀の歩みの中で，個々人の心の内側に囲い込まれた。つまり，様ざまな問題が個人の心の在り方の問題へと置き換えられ，個々人が心がけを改めるよう求められる時代となったのである。個人が神の前に罪を悔い改めるという思想は，キリスト教が二千年間にわたって掲げてきた主張である。これが，今日においては心理学という学問の名において，求められるに至った。

日本の教育に見る近代的二層構造の歪み

ユダヤ＝キリスト教的な理性を引き継いだ意識は，人間の行動を中心に世界のすべてを照らし出し，理想的な姿に導く役割を担わされる。この宗教の名が，表立って語られることはないが，「近代的価値観」という名目で，実質的にこの宗教思想が，明治期以来輸入され続けているのである。「人間の尊厳」といった言葉によっても語られる高く美しい理想と低く醜い俗悪との対比は，人間性の不可避の一部を切り離し，征服，支配されるべき敵と位置づけることから生ずる。このために，道徳全体にはかえって過度の緊張と憎悪が満ち，差別が産み出され，しかも正当化される。賀茂真淵や本居宣長などの国学者たち，また自然を尊ぶ安藤昌益などの思想家は，儒教批判の脈絡の中で，もう十八世紀にこのことを明確に指摘していた。

だが，黒船に象徴される軍事的な圧力下

で,「近代化」を急ぐしかなかった明治維新以後のわが国では，文明開化，脱亜入欧政策がもたらす十九世紀後半のヨーロッパ思想・制度の輸入が，儒教以上にその轍を踏むことには気付きにくかった。国学者たちでさえユダヤ＝キリスト教の影響を受け，天御中主神を創造主に重ねたうえ，その直系としての天皇支配を説く平田篤胤の系統が力を得た。篤胤自身の全体像は，けっしてこれに尽きるものではないが，その面が強調されたのは不仕合わせなことであった。

明治憲法下の天皇の姿は,「一神教」の神の引き写しである。「神聖にして侵すべからず」「万世一系」という規定にそれはよく現われている。明治以前にはそのような発想はなかったと言ってよい。大正から昭和初期にかけての「革新右翼」たちの思想も，ほとんどがこの路線の延長線上にある。大川周明が使いはじめ，その後一世を風靡した「日本精神」という言葉そのものが，ユダヤ＝キリスト教の影響を如実に現わしている。（大川には伝記的にもキリスト教の影響を受けた事実がある。）この思想を主導したのは政府だったが，民間にも，少なくとも表面的には，喜んで迎えられていった。

かつての軍国主義と戦争遂行の中で「物量に打ち勝つ」力として,「日本精神」が喧伝された。しかし，物質と精神を分離しかつ後者の優位と支配を主張する構えこそ，この宗教の根本教義と言えるものである。ユダヤ＝キリスト教的な理性主義・人間中心主義が，右翼思想の中に採り入れられているのである。

これらは，欧米列強の植民地政策に対抗するため，急場凌ぎに相手の武器を奪う戦略だった。つまり，江戸時代までのわが国の文明は，欧米諸国に比べ，全体としてはけっして劣った水準になかったのである。ただ，大量殺人機械の開発と中央集権的な動員に関するかぎりは，明らかに水を空けられていた。しかし日清，日露戦争での勝利など，思いの外うまく運んだため，急場凌ぎが長期化され，強化されるに至った。欧米への防衛のはずが，いつのまにか，植民地をめぐって戦うほどにまで「仲間入りを果たし」ていた。

言い換えれば，極めて柔軟かつ迅速だった明治初年の対応が，その後は急速に硬化症を発し，状況にそぐわない固定化を招いてしまった。借り物の原理をもって「本家」と戦ったのだから，敗戦も当然だったと言えよう。その結果をどう受けとめるかが，戦後の課題だったはずである。しかし結局は，明治から昭和の前半までと同じことが繰り返されてきたのではないか。

建て前からすれば，明治政府の欧化政策は，それまでの価値観をまったく作り替えるものであった。けれども，そのような急激な方向転換が可能だったのは何故だろうか。すでに各方面から議論されてきた問題だが，心理的ないし宗教的な側面から言えば，是非善悪，理論的な整合性などを問わずに，力の強いものに出会えば取りあえず尊重し，祀るという構えによるのであった。このため，日本の近代化は底が浅く，内発的な動機がなく，外見だけの借り物だとの批判もある。たしかに，さきに述べたとおり，明治以降数十年のあいだに日本の民間心理学はかなり大きな影響を欧米のユダヤ＝キリスト教から受けている。だが，それらはおおむね日本人の意識的な表層の留まり，無意識的な基底には，古くからの民俗心理が働き続けてきたと考えられる。この二層構造のおかげで，私たちの社会は，終戦後の悲惨な状況下にあっても，大きな道徳的混乱を免れたのではないか。

なるほど，底の浅い借り物だとする理解に

は，見るべきものがある。しかし，それが必ずしも批判の根拠になるわけではない。なぜなら，新しいやり方を導入するにあたって，うわべだけ借りるのではなく，原理から根本的に入れ替えるほうが常に正しいとは言えないからである。よりふさわしい底の仕組みを温存しつつ，うわべだけを借りることで，二層構造が有効に働き始めるのなら，それが正しいやり方にちがいない。和魂洋才，中体西用などの標語が，これに通ずる。取りあえず祀り，馴染んで共存し，やがて馴らし，さらには護り神に変える発想は，天神信仰を代表とする，わが国の土着信仰での怨霊との付き合い方である。明治初年において，維新政府が迅速かつ柔軟に「借り物の」西欧化を実現できたのは，この伝統に則ったからに他ならない。

したがって，うわべだけの近代化が問題なのではなく，うわべだけのはずだった借り物が，制度となるに及んで固着し，古くからの民俗に根付いた民間心理学の本音の道徳を脅かし始めたところにある。地域の風俗や祭りが，迷信や非行の温床とされ，方言は野卑な言葉，民謡や童歌は汚らしい音楽とされた。村の神々は大きな神社に合祀され，記紀神話の「由緒ある」神々に従属させられた。西洋の学問を身に付け，標準語を読み書きし，話し，ヨーロッパ民謡の輸入に他ならない文部省唱歌を歌うことが，「方言札」などの罰を伴って強制された。この競争を勝ち抜いた者が官吏として出世したのであり，さらなる出世のためには，欧米への留学も必要であった。

これらの政策の目標は，国民が天皇のもとで，西欧の近代国民国家と同じように，一元的に団結することであった。（キリスト教は現代にいたるまで，アメリカをはじめとする「先進諸国」の事実上の国教である。）その結果は，同じことをしてきた西欧諸国から，東京裁判で「戦争犯罪」を咎められ，「一億総懺悔」を余儀なくされたのであった。

反省は，明治期と同じく，またしても素速く巧みであった。戦地での「玉砕」，内地での原子爆弾，無差別爆撃が，黒船に代わった。ドイツ，イタリアなどの降伏，中南米でのアメリカの覇権が，かつての阿片戦争のわが国への影響と同じ効果をもたらした。ベトナムやイラクのように抵抗することはなく，多くの国民は強い占領軍を，少なくとも表面上は喜び迎えたのであった。形だけの「民主」主義と，アメリカ風の勤勉と英雄の「倫理」が建て前として導入された。

しかし，またしても明治期と同じ硬直化が始まった。「保守的」な人びとは，天皇制が維持されたことで，「日本の伝統」が守られたと錯覚した。これに対抗するため，「進歩的」な人びとはマルクス主義をはじめとする左翼思想に頼った。「敵の敵は味方」だと思ったのだろうが，これも結局はユダヤ＝キリスト教の伝統から出た宗教・思想運動なのであった。「史的唯物論」が，絶対主義国家プロイセンの御用哲学者だったヘーゲルの「理性の狡知」を逆立ちさせたに過ぎないことは，マルクス本人が認めているくらいである。この国の憲法が明治憲法の手本だったことは，中学生でも知っている。『資本論』の最初の邦訳者だった高畠素之は，やはりキリスト教の影響を強く受けた人物で，後に右翼の国家社会主義者となった。「転向組」なのだが，本質が同じだからこそ，簡単に乗り換えられるわけである。理性の自己実現を物質の発展法則と言い換えた思想は，正義の戦いの代わりに階級闘争を煽るものであった。

この両者が教育現場で激しく争ってきた

が，大局的に見ればいずれも主体性，能動性，積極性，自由，真理，正義といった近代西欧的な徳目を重視し，あとはそれが左右どちらの政治的表現をとるかの問題であった。それがこんにちでは，いよいよ個々人の内側，「内面」の問題，すなわち民間のひとりひとりの心を入れ替える課題となったのである。

土着の民俗心理の復権

さて，これらの問題は，個々人の心の在り方を問い進める道徳教育の問題に直結する。道徳の問題は，内容的には人間中心主義と理性主義への反省に集約されるだろう。人間性の一部を切り取って理想化したり敵視したりするのでなく，自ずから，在りのままを受けとめることである。わが国の民俗心理には，この発想がおそらく有史以前から流れているのだが，わが国の有史以来，知的選良の持ち分となった外来思想を軸に文字化された著作のなかには，明確な形で説かれることが少なかったし，近ごろでもまたそうである。民間心理学が明治以降に蒙った人間中心主義的な，ないしユダヤ＝キリスト教的な歪みを正す必要があるだろう。

自然への回帰と言ってもよいが，平凡に響くかもしれない。これはもう西欧においてさえ，長きにわたって論じられてきたことである。最近でも，「自然化 naturalize」といった表現で，自然や物質と人間との接近の主張される場合は多い。しかし，問題はこのときの自然の捉え方である。自然科学に代表される自然は「心無い」もので，自らは考えることなく，ただ法則に従って運動する。これが科学的ないし客観的合理性だが，この法則は，人間の理性によって作られたか，少なくとも理性によってのみ把握されると考えられている。つまり，人間を唯一の主体，能動性と積極性，自由の源に置く，ユダヤ＝キリスト教起源の西洋近代的な思想から生じてきた立場なのである。近ごろ「環境倫理」が大きな問題となっているが，資源として利用する立場からの考察では，「保護」とは言いつつ，人間中心の搾取と破壊の論理の延長でしかない。

まず内容的には，西洋近代的価値観に代えて，自然と人間が「お互い様」で関わっており，「お蔭様で」生かされていること，これが「有り難い」ことなのだとの発想を見直すのがよいのではないか。そして人間はまず，なによりも自然の一部なのである。過去の優れた思想家の文献的研究の意義は否定できないものの，むしろふつうの人びとが日ごろ考え，説き，実践してきた民俗心理のな知恵に学ぶことを主に考えるのがよかろう。これが土着思想である。文字化され，複雑な論理を操る思想のみが尊いとする根拠は見出し得ない。これはまた，わが国を含む非西欧諸国がおおむね共通して持っている自然と人間の捉え方の再発見でもある。ただしいまや，これを西欧文明をも説得できる形で提示する，理論的な考察が必要な時となっている。

「お蔭様」とは，「もらう」「いただく」ことであり，積極性・能動性・主体性とは異なる思想である。だが，消極性・受動性・従属性重視の思想というわけでもない。ここには例えば「させてもらう」ないし（自発としての）「させられる」が含まれることからも分かるとおり，活動は為されつつ，しかしその主体を，自己を含む特定の一者に定位しない思想なのである。「お蔭様」は，活動の焦点となる場，ないしは差し当たり注目を引く何者かを通して見た表現だが，その前提に，能動と受動，積極と消極，主と従などの対立とは異なる軸が，はじめから設定されている。

それが「お互い様」と表現される仕組みで

ある。「互い」とは「違い」＋「会い」を語源とし，異なる者の出会う様である。出会いの場，すなわち「あいだ」にこそ力と働きが生ずる。力の強い者を取りあえず祀るという構えも，この「お互い」の場をよりよく形成する努力の一環と理解できる。このような人間性のありのままから，すなわち「自ずからなるもの」としての自然から離れることの少ない仕掛けを内容に，道徳の徳目を立てる。そのような建て前なら，理想を基準とした差別から来る過度の緊張は無く，本音と建て前の乖離や敵対が避けられる。明治以降は，唯一の正義と権威を主張する執拗な圧力が場の形成を歪ませてきたし，その教えは内容的にも「お互い様」を否定するものだった。

つぎに，こうした状況での道徳教育の実践には，衰えてしまった基底部分の補強のため，言葉よりもむしろ体を用いた仕方で「お互い様」と「お蔭様」の感覚を取り戻す必要がある。これが教育の形式の面である。理性主義的な高い理想を教える場合ほどではないにせよ，教室での講義や文章によるだけでは，これらの感覚は身につかないだろう。と言うのは，そのような教え方自身が，教室での言葉や論理の特権性を主張しているので，「お互い様」に外れるからである。基底部分の本音を構成する民俗心理の力が衰えているとき，建て前だけを教えたのでは，結果として，その場しのぎの言葉を並べよとの教育になる。体のなかに眠っている無意識の民俗心理を目覚めさせることこそが重要なのである。

道徳教育における言葉の重要性を否定するのではない。論理的な考察や，また巧みに工夫された標語なども，道徳の指針として役立つのは間違いない。明治以後の徳目の多くが，西欧の概念の翻訳のために新しく作られた，または転用された漢語で表現されてきたことは，言葉の上滑りに拍車をかけている。「お蔭様」や「お互い様」のような「やまとことば」で言われてこそ心に響く。しかし，言葉の万能性は否定しなければならない。明晰な言葉に沿った理解さえあれば，道徳の総てを導けるわけではない。それは「世俗的な欲望から離れた純粋な知性のいとなみ」こそ最高だという理性主義，精神主義から来る誤解である。

体を使うと言っても，使い方がまた問題となる。例えば，オリンピック種目に代表されるような「スポーツ」では，体は精神の支配を受け，外から設定された目標の達成に使役される。ラジオ体操は，体感を無視し，体を機械的に曲げ伸ばしする訓練であり，軍隊の発達とともに，規格品の大量生産にむいた体の使い方の訓練として普及が計られた。これらでは，体は制御と支配の対象でしかない。

これに対し，かつてわが国で発達した柔道，剣道，弓道などの「道」では，勝負は時の運であって，それに伴う境地こそが問われた。書道も字を上手に書く技術ではなく，墨を磨ることから始まる一種の瞑想であって，字はその境地の表現であった。修験道の登山は，高い山に登るのが目的ではなく，山で何に出会うかが問題であった。明治初期までのわが国では，これらの「修業」は普通の人にとってもあたり前のことであり，成人式の儀礼としても用いられていたのである。（オウム真理教が「修業しませんか」と若者を誘って教勢を伸ばしたのは，この忘れられた，しかし消えてはいない欲求に訴えたものであろう。）

学校教育の正課に，こうした「道」の伝統がほとんど入れられず，わずかにあったものもスポーツ化，技術化し，さらには排除される傾向なのは嘆くべきである。音楽や踊りも

同様で，日本の民間のものを禁止したうえ，西洋和声法によるピアノ伴奏で，ヨーロッパ民謡・民舞が教えられてきた。まるで自国民を相手に，外国の植民地主義を代行しているようで，笑止の極みである。

それらしい徳目ばかり道徳ではない。それが「道」の徳であるなら，あらゆる活動のなかに埋め込まれていて，人と自然のお互い様の関わりを導くものである。だから，明治以降の公教育がわが国の道徳を破壊してきた跡は，いわゆる道徳教材以外のところにも多く認められるが，それだけに，様ざまな方面から手を打ってゆけるとも言えるだろう。

結び：道徳教育の問題

かつて明治期には政府によって修験道の禁止令が出され，戦後は一切の宗教と教育を切り離す建て前になっているが，広い意味での宗教にこそ土着の民俗心理は含まれている。だから，広い意味での宗教を排除した形では，道徳の教育は不可能である。

敗戦後は，科学的ないし合理的客観性の思想が強調される傾向にあったが，これが行きすぎるといわゆる「科学」以外の思考法を認めない「科学主義」となる。とくに，「科学的な証拠がない」ことは存在しない，とするような合理性の過度の強調は，それ自体が一つの「迷信」に他ならないのだが，科学史から見れば，世俗世界の合理性とその内部での禁欲・勤勉を説くプロテスタンティズムに繋がっている。科学的合理主義は，必ずしも宗教的に中立ではないのである。ただし，近代科学がユダヤ＝キリスト教の影響下で成立したのは確かだが，可能性はそれのみに尽くされるわけではない。今後の発展においては，わが国の土着的なそれを含む別系統の宗教性が寄与できる見込みの大きいことは，付け加えておかなければならない。

例えば，山形県の出羽三山の信仰の特色の一つは，性・色事と，日本に土着する祀りの思想との，深い結びつきを示す点にある。これが湯殿山で，とくに顕わになっている。わが国の山の神は，一般に女である。湯殿山神社に社殿は無く，御神体は，たおやかな女神の体をなす，なだらかな山並みの谷あいに在り，鉄分と硫黄と塩分を多く含む温泉の湯の花が固まってできた，赤い岩である。これが女神の秘所に当たることは一見して明らかで，それゆえ，そこで見たこと，したことを語ってはならないとされている。

語られぬ　湯殿にぬらす　袂かな　［芭蕉］

裸足で赤い岩に上り，湧き出る湯に口を付けて飲むのが参拝の作法とされている。(「湯殿」なので，かつては裸になったのかも知れない。) 粘り気さえ感ずる，匂いの強い濃い湯は，鉄分のため渋く，塩からく，女神の粘液とも月経血ともなっている。山の神が女なのは，火山がときどき赤い液体を噴き出して爆発することに繋がるが，温泉はこれを優しい形で体験できる場なのである。この湯はまた，女神の乳でもあると感じられた。(乳は血液から作られる。) 芭蕉の句の「濡らす袂」には，この女神との秘め事が艶やかに込められている。

わが国の祭りが，このような色事絡みの事例に事欠かないのは，この他に，諏訪の御柱祭を挙げるだけでも充分であろう。大和朝廷の正史である記紀神話さえ，男女の神の色事から国の産まれる様や，アメノウズメの裸踊りが世の暗闇を救う様を描いている。色事は，異なる者の出会う「お互い様」のひとつの極みである。わが国の土着思想は，そのよ

うに考えてきた。江戸時代まではそれがあたり前であったし，現在でも私たちはそれを，本音の奥では忘れていないと信じたい。（インドをはじめ，他の多くの文化にも見られる性格である。）

ところが「セクハラ」なる犯罪が，最近になって急にアメリカから輸入された。この背景には，色事や肉体を穢れた避けるべきものと位置づける価値観がはっきり認められる。さらに驚くべきことには，被害者の不快感の証言がこの犯罪を立証する根拠となり，色事への嫌悪と合わせると，これが原理的にはかつての魔女裁判の再現だと気付かされる。これは重大なことである。このような思想がわが国に定着するとは考えたくないが，いまや女子中学生さえ，「セクハラ」だと言って，教師の指導を牽制する。若者の使う「キモイ」という流行り言葉の中にも，この響きが感じられる。

道徳とは，人を含む自然との付き合い方と理解するかぎり，けっして取り澄ました理想的な徳目に留まるものではなく，身心ともに与る働きのあらゆる位相に見出されるのである。つまり，楽しみ，喜び，怒り，酔い，そして狂うことさえ含まれる。それらをどのようにこなすかの修練に他ならないことが，忘れられてしまっている。

この意味から，文部科学省が全国の小中学校生徒，総計千二百万人に配布した『心のノート』の，道徳教材としての有効性は疑問である。全国一律の奇麗事を並らべ，道徳を個々人の心の中の反省とそれを表現する言葉に置き換えようとする試みは，これまでの誤りを強化することでしかない。（道徳教育の中央集権化にからむ問題がまた別に付け加わるけれども，ここでは論じるゆとりがない。）

またここから，教育をすべて学校のなかに囲い込むのは止めるべきだとも言える。近ごろ始まった体験学習などは，傾向としては好ましい。地域社会や家庭の本来の教育力の復活を図ることも，当然に求められる(註)。また，異年齢集団の形成による，子供どうしの切磋琢磨，文化の伝承も重要である。

ちなみに最近，幼女の誘拐殺人事件を機に，性犯罪への取り締まりの強化が取りざたされている。しかし，「清く正しく正常な」人格を喧伝し，違反を強く排斥し，厳罰をもって臨むことが問題を解決するとは思えない。むしろ逆さまに，多数者とは違った傾向を持つ少数者を心理的に追いつめ，犯罪的な行動に走らせる危険の方が大きいと思われる。じっさいに，同性愛というだけで強い差別を受けるようなアメリカ合衆国の文化の中でも，同性愛者は減らないし，性的な接触を目的とする幼児の誘拐も後を絶たない。彼らは，自分が「異常な傾向」を持った価値の低い人間ではないかと悩み，追いつめられて反社会的に行動する。わが国の土着的な伝統では，同性愛も幼児愛もあたり前のことであった。しかも，それがあったから日本の文化が欧米に比べて遅れていたとする根拠は，何も無いのである。（私たちはみな「異常な犯罪者の子孫」だというのだろうか。）

新しそうなことを輸入しては担ぎまわるのだけが良いのではない。そういう人たちが，この百年あまり「学識ある人」とされてきた。だが，私たちを育んできた，古くても大切な「有り難い」ものをどう守るのか，どう育み返すのか，考え直すときに来ている。そのようにしてのみ，乖離や敵対が少ない姿での，言い換えれば「和をもって尊しとなす」心理の二層構造が維持できると考えられる。もちろん日本だけというのでなく，とくに非西欧文化圏での伝統文化の実践や，文字記録だけに

よるのでない日常的な祀り，慣わしなどを謙虚に学びつつ，そこから，それにふさわしい学問と教育の枠組みを，研究者・教育者自らが，身心ともに用いつつ磨き出してゆく姿勢こそ，いま必要と考えられる。

註

地域の祭りで，未成年の飲酒が問題とされる場合がある。未成年の禁酒が，法律で禁止するにふさわしいことなのかどうか，再考に値しよう。これは限定付きの「禁酒法」であって，やはり日本のキリスト教徒の主導で制定された法律である。正月に，屠蘇を子供に飲ませたところ，法律違反だと批判されて悩んだという人が，実際にいる。(健康問題を言うなら，勉強で夜更かしするのはどうなのだろうか。) 喫煙も同様で，法律により犯罪者が作り出されるので，中等教育の現場ではギスギスした追いかけっこが常に行なわれている。具体的に論ずるゆとりがないので，残念だが，問題の指摘に留めておく。

参考文献

フロイト 『精神分析入門』懸田克躬（訳）1966 中央公論社

瀧井一博 『文明史のなかの明治憲法 この国のかたちと西洋体験』2003 講談社

トーマース アクィーナース 高田三郎 稲垣良典 山田晶 ほか（訳）『トマス・アクィナス 神学大全』1-39 2000- 創文社

ユング 池田紘一（訳）1995『結合の神秘 1-2』人文書院

―― じつかわ みきろう ――

国内研修：姫路獨協大学法学部教授

指 導 者：国立民族学博物館 江口一久教授